

に、殿上深く垂れさせられた御簾は、内より二人の茜袍の手に、靜かに捲き上げられる。諸員起立の間に凡そ七分の所で捲き止められると、長閑に掻き鳴らす和琴の音も加はり、やがてのび／＼と落ちついた歌聲も聞える。勿論今の世の聲ではない。合間合間のパタ・パタと音のするのは、笏で採る拍子でもあらうか。この間に神饌が供せられ、祝詞が奏せられる。但し左の幄舎の前方三分の一ぐらゐの所に在つた自分の位置からは、御内陣の模様は窺ひ知ることが出來ず、祝詞の間、相圖により起立して敬禮を表するのみである。

祝詞が終り、樂の音がやみ、參列諸員が片唾を呑んで、一圖に廂上に注目する間もなく。起立の相圖が行はれる。東廂の北端に人影ゆらぐと見る間に、黒袍の前行に續く御劍御璽の捧持者の間を、黄櫨染の御袍、立纓の冠を召された聖上陛下が、御裾を待從に捧げさせ給ひ、げにも威風堂々として出御せさせられる。畏けれど自からなる帝王の御風格とや申し上げるべきであらう。御弟の宮殿下を初め奉り、供奉遊ばさるゝ各宮殿下もすべてまた昨日の通りである。

やがて聖上陛下御自から御拜を行はせらるゝとおぼしく、殿内西側の座に着かせらるゝ各宮殿下の笏を正して御頭を俯せらるゝ御有様が伺はれるとともに、御内陣の奥深きあたりとおぼしく、さびたる御鈴の音の、正しき間を置きて響き渡るが聞える。これこそ大神の御聲と覺えて、森嚴の極みである。御大禮の儀ををへさせられ、けふしも事の次第を神靈に告げさせられ、且は御神樂に神靈を慰め給ふ御儀のことゝて、御代萬歳と聲も高く壽ぎ奉りし